

タスマニアの高校から（3）

試験で失敗しても笑い話にしかない

本 田 貴 文

「なぜ日本人のやるような方法を取らないのだろうか」。または、逆に、「なぜオーストラリアで許されていることが、日本では禁止されているのだろうか」。日本とは異なる点を発見するたびに、その相違点について深く考え、議論する。その良い例が「教育」であろう。

休み時間は自由に行動

Don College の生徒は膨大な休み時間を自由に行動できる。休み時間にタウンに行つて昼食を取つてもいいし、家に帰つて寝ていてもいい。仕事をする時間に使つてもいいし、ビーチに行つて遊んでいてもいいのである。

また、授業に出るか出ないかもそれぞれの責任にまかされている。先生も出席は取るが、特に取り留める様子もない。もちろん、全員が授業に出席する訳ではない。休み時間から戻つてこない生徒も少なからずいる。いや、むしろ一〇〇%全科目に出席している生徒など皆無ではないだろうか。

僕は日本での窮屈な生活に嫌気がさしていたので、来たときはすばらしいと感じたが、日本の高校生からしたらこれらのことには違和感があるにちがいない。日本では休み時間に校外を歩くことは許されていないし、授業をサボつたら、先生が走つて追いかけてきて、僕を捕まえ席に座らせるだろう。

もちろん、日本の高校生たちは「教育を受ける権利」



を有しており、それを行使することは非常に重要なことである。その点については基本的に合意するが、それと心に余裕のない生活を送ることとは違う。高校生は一〇〇%授業に出席することが望まれ、それからはみ出し、レッテルを貼られた者は「不登校」、「登校拒否」のレッテルを貼られ、高学歴を得られなかった者は一生ロクな仕事に就けず、リストラされた者には「自己責任論」が待っている。僕たちはこういった悪循環の中に暮らしている。

日本では社会が僕らに要求する

以前、こちらの友達に「日本は学歴社会で、良い大

学を卒業していないと良い職に就けない。中には貧しかったり、親の介護のために学校に行けない人もいる」と言ったことがある。Dの生徒の中で大学に行くのは六、七割ぐらいだろうが、仮に学歴がなくてもそれなりの仕事があるのでは得られるし、生活できる。すると、彼は「でも、こっちは誰も僕らに良いマーク（成績）を期待していないし、もし試験で失敗しても、それは笑い話にしかないよ」と言った。たしかにそのとおりである。

日本では親や先生、塾の先生だけでなく、そのコミュニティ全体が僕らに良いマークを取ることを期待、要求している。もし、僕が失敗したとき、家族や友人などの「溜め」がなかった場合、その disadvantage（損失）は僕の子ども、そして孫にまでツケとして回ってくるのである。

自分の意思で勉強

「期待されていない」とは言っても、とても熱心に勉強する生徒はDには多い。中でも、日本語の授業を取っている生徒たちのやる気は特筆すべきものがある。「期待されていない」と言った彼もまた日本語

を学んでおり、彼はケータイで日本の女の子とチャットをして勉強している。もちろん、それはカタコトの日本語なのだが、彼の勉強にかける思いはすさまじいものがある。日本の生徒で外国人とメールをして英語を勉強しようという人がいるだろうか。学歴社会という足かせがない彼らは自分の意思で学校に来て、自分の意思で勉強するのである（写真参照 図書館でいつも友人のジョシユアールと英語・日本語を教え合っている）。

しかしながら、窮屈な社会と引き換えに日本の高校生が高い学力を手に入れているのもまた事実である。オーストラリアに来る日本人留学生が無条件で良い成績を得られることからそれが分かる。どちらの社会のほうが生きやすいのかは分からないが、これからの理想の社会を考えていく上で、この両者の比較は意味のあるものになるだろう。

～サイモン＆ガーファングル編～

“一万人かおそらくそれ以上の人々”はまるでクラシックコンサートでも見ているかのように、真剣なまなざしで彼らを見つめている。かつて、“静寂の音”に

耳を傾け、“混沌に橋を架けた”彼らの歌声は時代を超えて再び僕らを涙させる。彼らの原点のフォークでありながら、確実に僕らの心を振るわせるロックであり続けるそれは、もはやサイモン＆ガーファングルという独立したジャンルであるといえる。そう、サイモン＆ガーファングルのコンサートに来たのである。

メルボルンまで連れて行ってくれたホストファミリー 中学二年のとき、英語の勉強のためにサイモン＆ガーファングルを聞き始め、すぐに虜になった。美しいメロディーとそれに乗せた二人のハーモニー。とくにポール・サイモンの紡ぎだす広い詩の世界に心を奪われた。彼らのすべてのCDとDVDを集め、何度も何度も繰り返し聴いた。そして、ギターを始めた。

しかし、彼らはとつくの昔に解散しており、仲も悪いと聞いていたので、再結成コンサートを見ることができるとは夢にも思っていなかった。それは、まるでビートルズのように自分の中で過去のものとして処理されていた。

きっかけは、インターネットでサイモン＆ガーファ

ンクルが来日することを知ったことからだった。もと
もと二〇〇九年六月にトミー・エマニユエルというオー
ストラリア人のギタリストのコンサートを見に行こう
とホストファザーと相談していた（ウチのホストはす
ばらしいが、中でもホストファザーが一番すばらしく、
音楽がすぎてよくその話をする。このときも、せっかく
オーストラリアに来たのだからトミー・エマニユエルに
連れて行ってあげると言われていた）ので、サイモン
& ガーファンクルはあきらめて、せめて日本の両親と
弟だけでも行けばいいやと思い、コンサートがあるこ
とを知らせてあげた。

後日、日本に電話したときに父に「え？ トミー・
エマニユエルよりサイモンとガーファンクルの方がい
いじゃん」と言われ（もちろんトミー・エマニユエル
も凄いギタリストなのだが）、「でも……飛行機代もあ
るし、サイモンとガーファンクルは高いから……」と
言ったら、「払ってあげるよ、行ってきな」、「うん……
じゃあ相談してみる……」ということになった。

自分からトミー・エマニユエルに行きたいと言って
おきながら、やっぱりサイモン&ガーファンクルに行
きたいなどということは、非常に言いにくいことだっ

たがホストに相談してみた。すると、すばらしいこと
にマッハでチケットを取ってくれ、さらにすばらしい
ことに、わざわざ自分らがメルボルンに行く理由を作
るために、コンサートと同じ日時に行われるフットボー
ルの試合のチケットを取って、わざわざメルボルンま
で僕を連れてきてくれた。交換留学生は一人で旅行が
できないためである。

結局、僕とRandy（おばあちゃん）のヘザーはコン
サートへ、ホストマザーとホストシスターのゾーイは
フットボールへ行くことになった。ホストファザーは
仕事のため行けなかった。

天使の歌声は味のあるものに

コンサート会場に入ったときの印象は「意外と小さ
いな」と思った。チケットはやはり人気があるのか、
後ろのほうの席しか取れず、半ばあきらめていたのだ
が、日本のでかい球場やコンサートホールと比べ、オー
ストラリアだからか思ったより大きくなく、後ろのほ
うの席でもしつかりとバンドを見ることができた。以
前、東京ドームにローリング・ストーンズを見に行っ
たときはミック・ジャガーが米粒ぐらいにしか見えな

かった。そのホールはメルボルン市内のロッド・レイバー・アリーナといい、普段はコンサートのほかには二つの試合に使用されるらしい。

長い沈黙を破り、ついに彼らが出てきた。実際に彼らを肉眼で確認するまでは、あまりのハーモニーの完璧さゆえに、メディアが作り出した虚構のものとさえ思っていた。一瞬、観客がすさまじいほどに盛り上がるが、すぐに静まり返る。セットリストの一曲目“Old Friends”が始まるからである。そう、これはロックのコンサートであるが、サイモン&ガーファングルのコンサートなのである。「七〇になるなんてどんなにかおかしなことか。君には想像できるかい?」。かつて、そう歌っていた二人は現在六七歳。その七〇歳になろうとしている。しかしながら、衰えとは逆に彼らは輝きを増していた。

さすがに七〇近いこの人たちが、全盛期ほど歌えるとは思っていなかった。とくに、ガーファングルの「天使の歌声」はすでに過去のものだと。しかし、多少枯れていてもその声は味があるものに変化しており、そして彼らのパフォーマンスは、今まで見たどのライブの映像よりもすばらしいものであった。この人たちは、

は、年寄りでもただの年寄りではない、サイモン&ガーファングルのなんだ、と再認識した。

今回のライブでこれまでと違うのはポール・サイモンとアート・ガーファングルのそれぞれのソロのコーナーがある、という点だった。サイモンは「グレイスランド」から、ガーファングルは自身のヒット曲とちやうどその日(六月二十六日)に亡くなったマイケル・ジャクソンのために“*Heart In New York*”を歌った。これによつて、まるでサイモン&ガーファングルのコンサートとポール・サイモンのソロコンサート、アート・ガーファングルのソロコンサートを同時に見に来たような感覚だった。

最後はガーファングルがしつかり「明日に掛ける橋」を歌いきる。終わつたときは率直に「え?もう終わり?はやつ?」と思った。まるで、一瞬の出来事のようにだった。サイモンがアンコールの“*Leaves That Are Green*”で、「この曲を書いたのは二一のときだった、今は二二だけど、それも長くはないだろう」と歌うと、観客からクスクスツと笑いがもれる。全盛期と言われる二〇代のころからの意欲はそのままに、いや、むしろそれ以上に彼らはエンターテイメントを追求しているの

である。

都会は多民族

メルボルンに来たついでにここに滞在しているほかの交換留学生と連絡を取り、会う約束をした。彼らとは五ヶ月ぶりに再会し、メルボルン市内を案内してもらった。

初めて来たメルボルンのあまりの大きさにびっくりした。高いビル群とひしめき合う人々、僕は東京出身にもかかわらずタスマニアで長く田舎生活を送ってきたせいか、都会にびびってしまった。さらに、中国人をはじめオーストラリア人ではない人が多いのも感じた。タスマニアのデボンポートには白人しかないからか。「ああ、オーストラリアは多民族国家なんだ」と思った。

(ほんだ たかふみ・東京都立三鷹高校三年、
オーストラリアに交換留学中)

パン食考

定年になってから朝食にパンを食べることが多くなったが気になることがある。

一般に個人経営の店でつくるパンは甘く軟らかく口当たりがいい。全国的規模のメーカーのパンは、甘さが控えめである。万人向けに味を押さえているのかも知れない。それにしても甘さと軟らかさは尋常ではない。スーパードなどの調理された惣菜も様に甘くつくられている。巷で売れる食品の要諦は、甘く口当たりのよいことと心得ているように思える。

最近、私の住む町に定年退職後、趣味を生かしてドイツパンをつくって売っている店ができた。このパンは固くて、お世辞にも食べやすいとは言えない。噛みしめると甘みが出てくる。まことに質実剛健なパンである。そういえばイタリアで食べたパンも固くて味がなかった。おそらくパンはバターやジャムをつけることが多いからだろう。パン食の歴史の短い日本ではまず甘さと口当たりの良さが勝負を決めるのだろうか。それにしても最近の世の中の風潮同様、味覚が安直過ぎないか。

(大滝)